

最近の韓国の食肉需給動向

調査情報部 伊佐 雅裕、中島 祥雄

【要約】

韓国の畜産農家戸数は高齢化による離農、担い手不足などにより年々減少傾向で推移しているが、経営規模の拡大により生産量は維持・拡大を続けている。しかし、F T A 締結国からの輸入が徐々に増加していることから、輸入品と競争可能な低コスト生産や差別化による価格維持が重要になっている。

1 はじめに

韓国の食肉需給は、日本と同様に、輸入濃厚飼料による国内生産と輸入食肉によりバランスをとっている。

本誌では、ここ10年程度の牛肉、豚肉、

鶏肉の需給動向を中心に、日本との違いと自由貿易協定（F T A）締結国からの輸入動向について分析し、報告する。

2 韓国の畜産の概要

（1）生産動向および輸入動向

韓国の畜産農家戸数は、高齢化による離農、担い手不足などにより年々減少傾向で推移しているものの、政府による畜産業の近代化に向けた支援もあり、経営規模は拡大している。乳牛の飼養頭数は横ばいから減少傾向

にあるものの、肉牛、豚および鶏の飼養頭羽数は増加傾向で推移している（表1）。

また、韓国も日本と同様に、自国の生産のみでは、国内の需要を満たすことが出来ないことから、畜産物の輸入により需要を賅っている。

表1 韓国の家畜飼養頭羽数・戸数の推移

区分		2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
肉牛	飼養戸数(千戸)	190	184	181	175	172	163	147	124	104	94
	飼養頭数(千頭)	2,020	2,201	2,430	2,635	2,922	2,950	3,059	2,918	2,759	2,676
	うち繁殖雌牛(千頭)	871	941	1,023	1,085	1,203	1,249	1,232	1,166	1,123	1,099
	一戸当たり飼養頭数(頭)	10.6	12.0	13.4	15.1	17.0	18.1	20.8	23.5	26.5	28.5
豚	飼養戸数(千戸)	11.3	9.8	7.7	8.0	7.3	6.3	6.0	5.6	5.2	4.9
	飼養頭数(千頭)	9,382	9,606	9,087	9,585	9,881	8,171	9,916	9,912	10,090	10,187
	うち子取り用めす豚(千頭)	1,012	1,004	913	966	976	903	962	895	937	958
	一戸当たり飼養頭数(頭)	830.3	980.2	1,180.1	1,198.1	1,353.6	1,297.0	1,652.7	1,770.0	1,940.4	2,079.0
鶏	飼養戸数(戸)	3,559	3,420	3,196	3,539	3,604	3,403	3,144	3,087	2,989	3,004
	採卵鶏飼養羽数(千羽)	57,240	56,093	59,168	62,967	61,691	62,425	61,344	64,824	67,674	71,877
	ブロイラー飼養羽数(千羽)	55,380	56,227	54,479	67,194	77,871	76,435	76,130	76,487	77,746	81,851
乳牛	飼養戸数(千戸)	8.3	7.7	7.0	6.8	6.3	6.1	6.0	5.8	5.7	5.5
	飼養頭数(千頭)	464	453	446	445	430	404	420	424	431	411
	うち経産牛(千頭)	319	310	303	304	296	283	299	304	305	293
	一戸当たり飼養頭数(頭)	55.9	58.8	63.7	65.4	68.3	66.2	70.0	73.1	75.6	74.7

資料：韓国統計庁

注1：各年12月調査。

2：養鶏の飼養農家戸数は、採卵鶏農家およびブロイラー農家の合計である。

韓国には、日本の政令指定都市に当たる8つの特別市・広域市と日本の県に当たる9つの道が置かれている(図1)。

図1 韓国の行政区分



地域別の飼養頭羽数を見ると、表2の通りであり、肉牛は、慶尚北道や全羅南道などで多く飼養されているのに対し、乳牛、豚および鶏は、京畿道や忠清南道など、大消費地であるソウルに近い地域で多く飼養されている。

鶏は、京畿道や忠清南道など、大消費地であるソウルに近い地域で多く飼養されている。

表2 2015年12月現在の行政区別頭羽数および農家戸数

区分	肉牛		豚		鶏		乳牛	
	頭数(頭)	農家戸数(戸)	頭数(頭)	農家戸数(戸)	羽数(羽)	農家戸数(戸)	頭数(頭)	農家戸数(戸)
1 ソウル特別市	112	5	-	-	-	-	44	3
2 釜山広域市	1,586	103	6,257	36	32,000	3	517	7
3 大邱広域市	19,169	631	9,645	5	475,000	5	1,255	19
4 仁川広域市	19,230	399	31,353	31	658,400	21	2,535	54
5 光州広域市	6,762	200	6,419	3	278,000	4	594	6
6 大田広域市	5,884	176	1,121	10	9,000	2	-	-
7 蔚山広域市	26,273	1,264	28,945	10	367,948	12	812	12
8 世宗特別自治市	-	-	-	-	-	-	-	-
9 京畿道	264,937	6,817	1,761,424	877	35,750,699	597	165,029	2,269
10 江原道	190,226	7,428	422,500	166	5,944,595	123	17,100	216
11 忠清北道	196,982	5,905	592,806	266	12,602,514	239	21,673	300
12 忠清南道	349,316	13,085	2,148,996	915	30,536,300	566	77,310	1,071
13 全羅北道	317,405	8,699	1,215,603	507	25,979,086	502	29,712	317
14 全羅南道	416,096	16,967	1,088,232	716	17,149,719	285	30,256	359
15 慶尚北道	577,258	20,199	1,201,562	482	22,740,454	414	35,569	529
16 慶尚南道	255,220	11,962	1,118,163	601	9,947,421	175	24,641	288
17 済州特別自治道	29,969	520	553,872	284	1,659,826	56	4,295	48
計	2,676,425	94,360	10,186,898	4,909	164,130,962	3,004	411,342	5,498

資料：韓国統計庁

また、畜産物の生産量および輸入量を、牛肉、豚肉および鶏肉のそれぞれで見ると、以下の通りである。

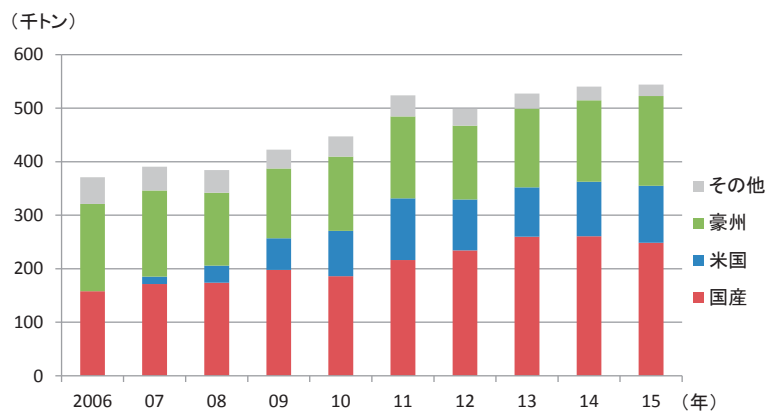
ア 牛肉

国内の牛肉需要の増加に伴い、生産量は増

加傾向で推移してきたが、2014年は前年並みとなり、2015年は、飼養頭数減少に伴い減少している（図2）。

輸入量は、概ね増加傾向で推移してきたが、2012年以降はほぼ横ばいで推移している。BSE発生の影響により2003年から輸入が

図2 牛肉の供給量の推移



資料：韓牛協会、韓国畜産物品質評価院、韓国肉類流通輸出入協会、「Global Trade Atlas」

注1：輸入量はHSコード0201（牛肉：生鮮および冷蔵）、0202（牛肉：冷凍）の合計。

2：2014年および2015年の生産量はalicで推計。

3：製品重量ベース。

停止された米国産牛肉は、2007年から輸入が再開され、2011年までは急速に輸入量を伸ばしたものの、2012年以降は伸び悩んでいる。一方で、2014年12月にF T Aを締結した豪州からの2015年の牛肉輸入量は、冷凍牛肉を中心に前年比10%増となっており、同年の米国のおよそ1.6倍となっている。

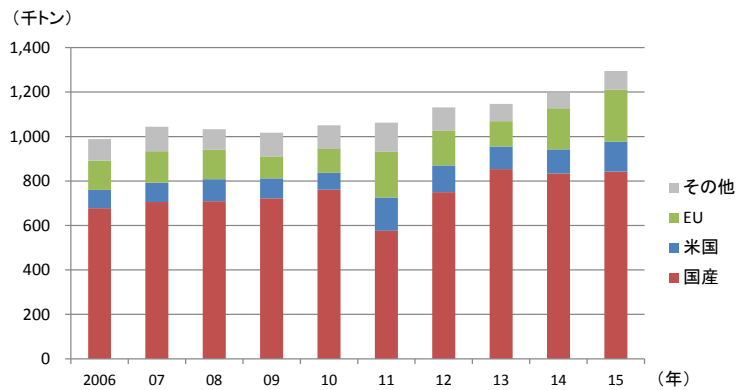
イ 豚肉

豚肉の生産量は、韓国国内での口蹄疫発生の影響により2011年に大きく落ち込んだものの、翌年には回復し、2012年、2013年

と増加傾向で推移してきた。最近は、アウトドアブームによるバーベキュー需要で豚肉の消費が増加しており、それに伴い国産豚肉の消費は増加傾向で推移していることから、生産量も概ね増加基調にある(図3)。

輸入量は、国内生産の不足を補う形で、年によって変動している。2015年の輸入量は、前年比約25%増となっており、F T Aを締結しているEUおよび米国などからの輸入が増加している。

図3 豚肉の供給量の推移



資料：韓豚協会、韓国畜産物品質評価院、韓国肉類流通輸出入協会、「Global Trade Atlas」

注1：輸入量はHSコード0203（豚肉：生鮮、冷蔵および冷凍）。

2：2014年および2015年の生産量はalicで推計。

3：製品重量ベース。

ウ 鶏肉

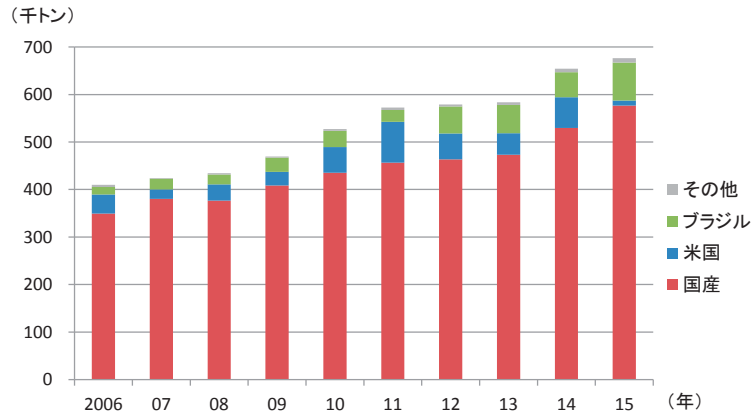
鶏肉の生産量は、2006年に高病原性鳥インフルエンザ(H5N1亜型)の発生により一時的に落ち込んだが、近年は増加基調にある(図4)。

輸入量は、国内生産不足を補う形で、年によって変動している。主な輸入先は、日本と

同様にブラジルと米国であるが、2014年12月に米国で発生した鳥インフルエンザの影響を受け、2015年の同国からの輸入量は前年比84%減と大きく減少している。

なお、現地報道によると、現在停止しているタイ産鶏肉の輸入は、2016年中頃には再開される見通しとされている。

図4 鶏肉の供給量の推移



資料：韓国畜産物品質評価院、韓国肉類流通輸出入協会、「Global Trade Atlas」
 注1：輸入量はHSコード020714。
 2：2014年および2015年の生産量はalicで推計。
 3：製品重量ベース。

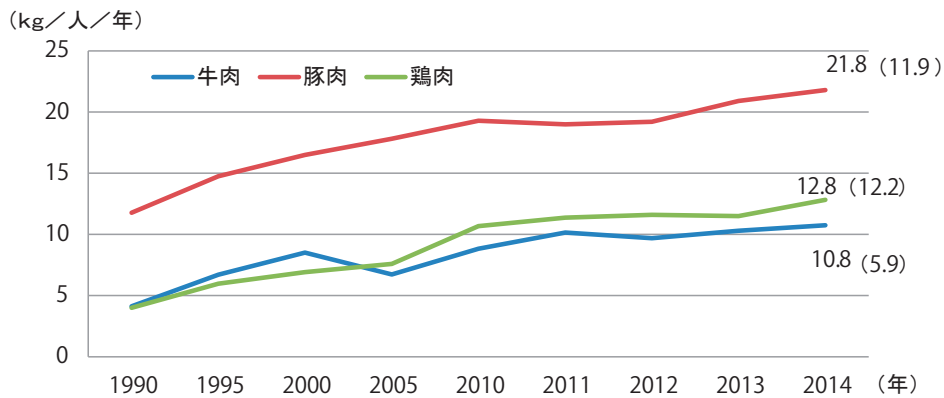
(2) 消費動向

韓国の1人当たり年間食肉消費量を見ると、牛肉、豚肉および鶏肉いずれも増加傾向で推移している(図5)。

食肉消費に占める割合は、豚肉が48%と最も多く、2014年の年間消費量は21.8キ

ログラムと、日本の同11.9キログラムの1.8倍程度となっている。次いで多いのは鶏肉で、同12.8キログラムと、日本の同12.2キログラムと同程度となっている。また、牛肉は同10.8キログラムと食肉消費に占める割合は最も小さいが、日本の同5.9キログラムの1.8倍程度となっている。

図5 1人当たり年間食肉消費量の推移

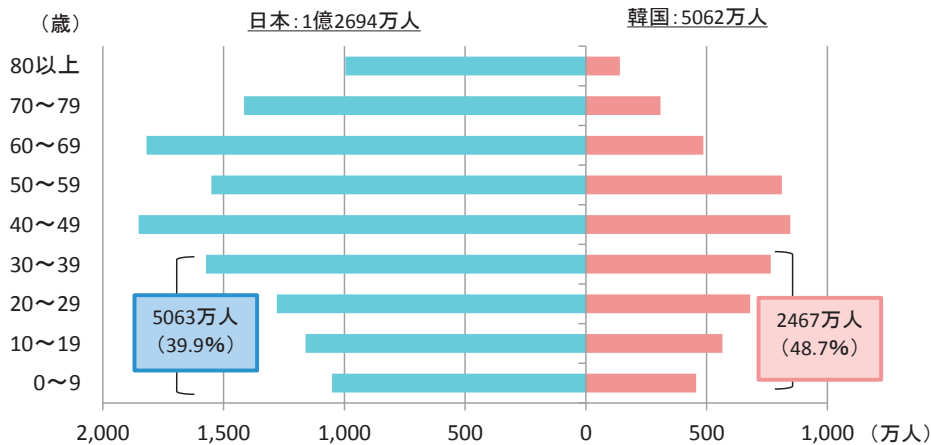


資料：韓国農業協同組合中央会、農林水産省「食料需給表」
 「MATERIALS ON PRICE, SUPPLY & DEMAND OF LIVESTOCK PRODUCTS」
 注1：()内の数値は、2014年の日本の1人当たり年間消費量。
 2：韓国は部分肉ベース。日本は純食料ベース。

韓国の人口は、現在も増加傾向で推移しており、年齢別人口構成を見ると、40歳未満の割合が、日本では4割弱であるのに対して、韓国では5割弱となっている(図6)。今後、

日本と同様に高齢化が進むと考えられるが、もうしばらくは、韓国の畜産物消費は増加すると考えられる。

図6 韓国および日本の年代別総人口（2015年）



資料：韓国統計庁、総務省「人口推計」

注：韓国の数値は推計値。

(3) 日本との比較（生産規模、自給率）

ア 生産規模

①肉牛

韓国の肉牛農家戸数は、10万2000戸と日本の1.9倍であるが、飼養頭数は日本と同程度の266万頭であり、1戸当たり飼養頭数は26頭（日本46頭）と小規模である。

また、牛肉生産量は、1頭当たりの生体重が少ないため、24万9000トンと日本の7割程度となっている。

②豚

韓国の養豚農家は、4900戸と日本の9割

程度で、飼養頭数は日本と同程度の997万頭であり、1戸当たり飼養頭数は日本より若干多い2035頭（日本1799頭）となっている。

また、豚肉の生産量は、84万2000トンと日本と同程度となっている。

③肉用鶏

韓国の養鶏農家戸数（肉用および採卵用を含む）は3065戸となっている。肉用鶏の飼養羽数は6888万羽、鶏肉の生産量は、57万7000トンといずれも日本の4割程度となっている（表3）。

表3 韓国および日本の生産状況

		韓国①	日本②	①÷②
肉牛	農家戸数(戸)	102,000	54,000	1.89
	飼養頭数(頭)	2,659,000	2,489,000	1.07
	生産量(トン)	248,526	336,716	0.74
	輸入量(トン)	295,369	494,219	0.60
	消費量(トン)	543,895	830,935	0.65
	1人当たり年間消費量(キログラム)	10.8	5.9	1.83
豚	農家戸数(戸)	4,900	5,300	0.92
	飼養頭数(頭)	9,971,000	9,537,000	1.05
	生産量(トン)	841,850	878,004	0.96
	輸入量(トン)	453,119	789,902	0.57
	消費量(トン)	1,294,969	1,667,906	0.78
	1人当たり年間消費量(キログラム)	21.8	11.9	1.83
肉用鶏	農家戸数(戸)	3,065	4,940	0.62
	飼養羽数:肉用鶏(羽)	68,878,000	174,806,000	0.39
	(飼養羽数:採卵鶏)(羽)	82,749,000	135,747,000	0.61
	生産量(トン)	576,500	1,526,637	0.38
	輸入量(トン)	99,886	529,434	0.19
	消費量(トン)	676,386	2,056,071	0.33
	1人当たり年間消費量(キログラム)	12.8	12.2	1.05

資料：韓国農林畜産食品部、韓国統計庁、農林水産省「畜産統計」、「食料需給表」

注1：韓国は、2015年3月の調査データ。

2：日本の肉用牛は、2015年2月現在のデータ。

3：日本の豚、鶏は、2014年4月のデータ。

4：韓国の肉用鶏の欄の農家戸数は、肉用鶏農家および採卵鶏農家の合計である。

5：日本の肉用鶏の農家戸数の内訳は、肉用鶏農家2380戸、採卵鶏農家2560戸である。

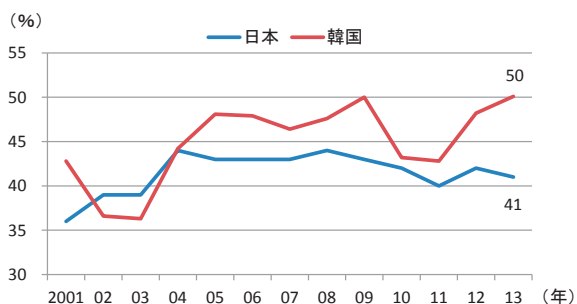
6：消費量は、両国とも生産量と輸入量の合計とした。

7：1人当たり年間消費量は、両国とも2014年のデータ。韓国は部分肉ベース、日本は純食料ベース。

イ 自給率の推移

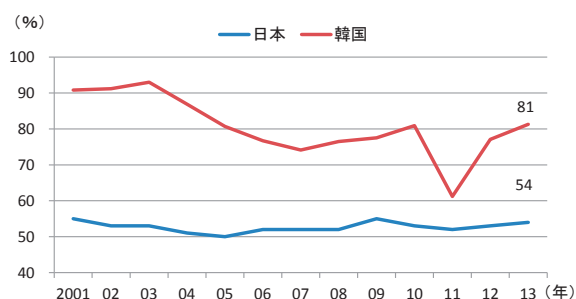
韓国では、輸入食肉は国産品と比較して安価であり、外食や加工品を中心に需要が高い。食肉の自給率は、近年、牛肉および豚肉が低下傾向で推移しているが、鶏肉は上昇している。政府が公表している直近の資料（2013年）では、牛肉50%（図7）、豚肉81%（図8）、鶏肉78%（図9）と、いずれも日本より高くなっている。

図7 韓国および日本の牛肉の自給率



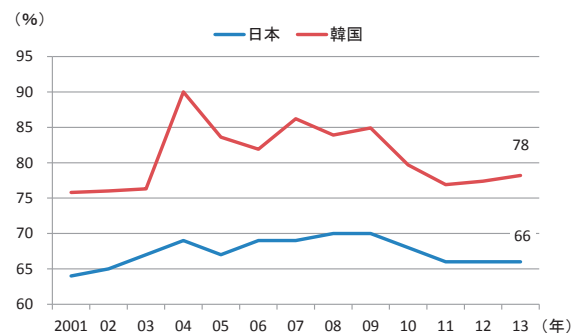
資料：韓国農林畜産食品部、農林水産省「食料需給表」

図8 韓国および日本の豚肉の自給率



資料：韓国農林畜産食品部、農林水産省「食料需給表」

図9 韓国および日本の鶏肉の自給率



資料：韓国農林畜産食品部、農林水産省「食料需給表」

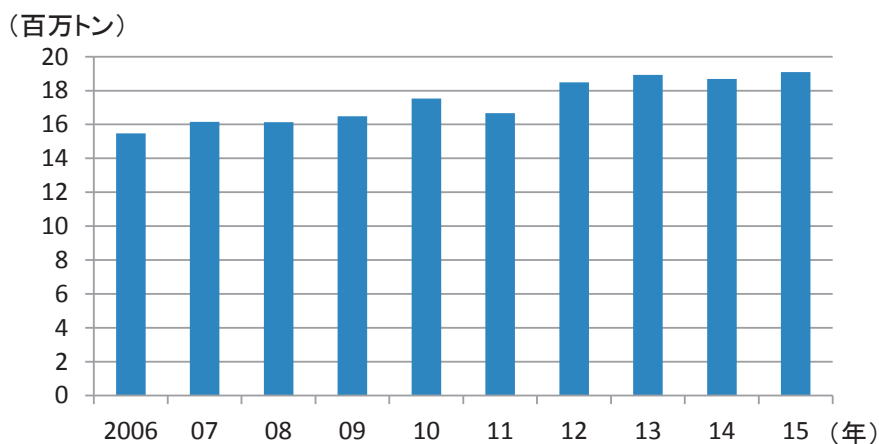
3 韓国の飼料需給の動向

(1) 畜種別配合飼料の生産状況

韓国の配合飼料の生産量は、家畜飼養頭羽数の増加とともに増加している。2011年の

口蹄疫発生の影響を受け、生産量は一時的に減少したものの、2015年は初めて1900万トンに達した。これは、日本の生産量の約8割程度の水準である（図10）。

図10 配合飼料生産量の推移

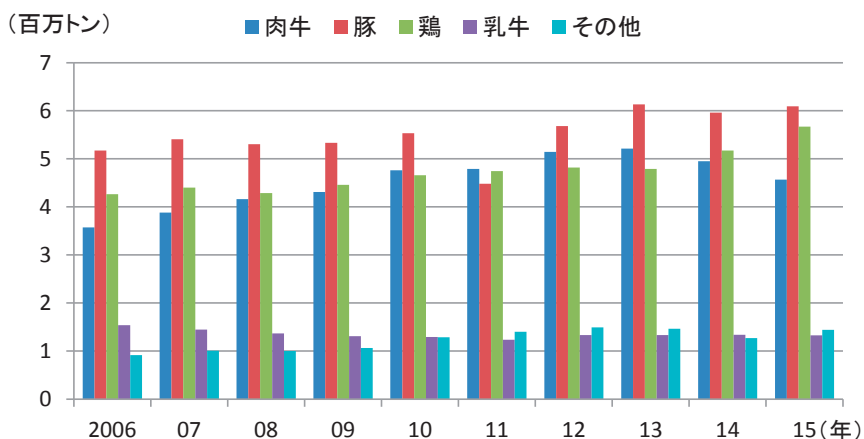


資料：韓国農林畜産食品部「配合飼料生産量」

配合飼料の生産状況を畜種別に見ると、豚肉の生産量が最も多いこともあり、養豚用配合飼料が最も多い。次いで、2014年からは、

鶏の飼養羽数の増加に伴い、養鶏用が肉牛用を上回っている（図11）。

図11 畜種別配合飼料生産量の推移



資料：韓国農林畜産食品部「配合飼料生産量」

鶏の飼養羽数が増加している要因について大韓養鶏協会では、インテグレーション化の進展に伴い、各社が生産規模拡大を図ってお

り、増羽が進んだ結果であると見ている。

また、このような大規模な生産を行っている企業は、飼料会社を設立、または買収によ

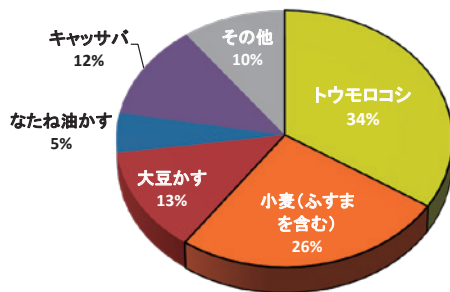
り、系列化することで、飼料を安価に購入している。

さらには、国内最大手の鶏肉企業は、最近、海運会社を買収し、飼料原料の調達から系列化を行いさらなるコスト削減に努めている。

(2) 配合飼料の原料構成

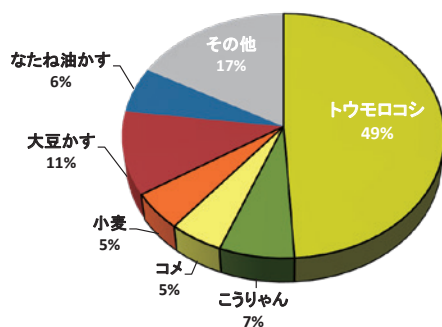
韓国における配合飼料の原料構成を見ると、日本とは大きく異なっている（図12、図13）。

図12 養豚用配合飼料の原料割合（韓国）



資料：韓国農林畜産食品部「飼料公定書」
注：2016年1月時点。

図13 肉豚肥育用配合飼料の原料割合（日本）



資料：公益社団法人配合飼料供給安定機構「飼料月報」を基にalic作成
注：2014年度の値。

ここに示したのは、養豚用配合飼料の飼料原料の配合割合で、韓国農林畜産食品部の「飼料公定書」に例示されたものと、日本で実際に行われている配合割合を比較したものである。「飼料公定書」は、韓国の飼料管理法に

基づく告示であり、配合飼料を製造する場合の標準的な配合割合を例示している。ここで示された配合割合は、各飼料メーカーが遵守する必要があるものではないが、同国の標準的な配合割合を示しているとされる。例示は畜種別にされており、例えば、養豚用ではかす類の割合が高いなど、畜種別の特徴が現れている。また、定期的な見直しも行われている。

なお、日本の配合飼料原料の特徴としては、およそ半分をトウモロコシが占め、これにその代替となるとうりゃんなどを加えると6割に達する点が挙げられる。

これに対し、韓国では、品質よりも価格を重視するため、日本ではあまり利用されないキャッサバを利用するなどの特徴がある。

さらに、表4の通り、韓国の配合飼料の原料割合を全畜種合計で見ると、2010年から2013年まではトウモロコシの輸入価格が高かったことから、小麦の使用割合が12%～17%と高い水準にあった。しかしながら、2014年にはトウモロコシの輸入価格が下落したこともあり、小麦の使用割合が7.7%まで下がっており、トウモロコシの割合を上げて小麦の割合を下げるなど価格の安い輸入原料にシフトする動きが見られる。

このように、主原料であっても輸入価格の変動に応じて使用量を増減させ、配合割合を大きく変更することは、韓国の配合飼料に見られる大きな特徴の一つである。

また、韓豚協会は、飼料価格をさらに抑えるため、生産者に対し、原料価格の安い油かす類を多く配合した飼料を推進している。

これは生産者の配合飼料に対するこだわりや、飼料の差別化により畜産物を銘柄化する動きが少ないため、出来ることと言える。

表4 配合飼料の原料割合（全畜種合計）

（単位：千トン）

区分	2010年		2011年		2012年		2013年		2014年		日本（2014年度）	
	使用量	割合(%)	使用量	割合(%)	使用量	割合(%)	使用量	割合(%)	使用量	割合(%)	使用量	割合(%)
	9,355	53.2	8,622	51.6	9,890	53.4	10,063	53.1	10,050	53.7	13,850	60.2
穀物	6,549	37.2	5,721	34.3	5,853	31.6	6,776	35.8	7,895	42.2	10,381	45.1
トウモロコシ	2,102	12.0	2,306	13.8	3,156	17.0	2,529	13.3	1,433	7.7	421	1.8
小麦	704	4.0	595	3.6	881	4.8	758	4.0	722	3.9	3,048	13.3
その他	1,844	10.5	2,124	12.7	2,056	11.1	2,117	11.2	1,912	10.2	2,758	12.0
糟糠類	133	0.8	139	0.8	159	0.9	186	1.0	182	1.0	323	1.4
動物性タンパク質	4,460	25.4	4,137	24.8	4,534	24.5	4,687	24.7	4,685	25.0	4,204	18.3
植物性タンパク質	1,777	10.1	1,523	9.1	1,539	8.3	1,692	8.9	1,780	9.5	2,827	12.3
大豆かす	582	3.3	791	4.7	795	4.3	900	4.7	608	3.2	-	-
でん粉かす	681	3.9	694	4.2	797	4.3	871	4.6	733	3.9	-	-
パーム油かす	1,419	8.1	1,129	6.8	1,402	7.6	1,225	6.5	1,564	8.4	1,377	6.0
その他	826	4.7	809	4.8	877	4.7	900	4.7	902	4.8	97	0.4
無機物	966	5.5	863	5.2	1,001	5.4	1,000	5.3	990	5.3	1,765	7.7
その他	17,584	100.0	16,694	100.0	18,517	100.0	18,953	100.0	18,721	100.0	22,997	100.0
合計	▲50		▲30		▲37		▲17		▲23		▲21	
ロス分	17,534		16,664		18,480		18,936		18,698		22,976	
流通量												

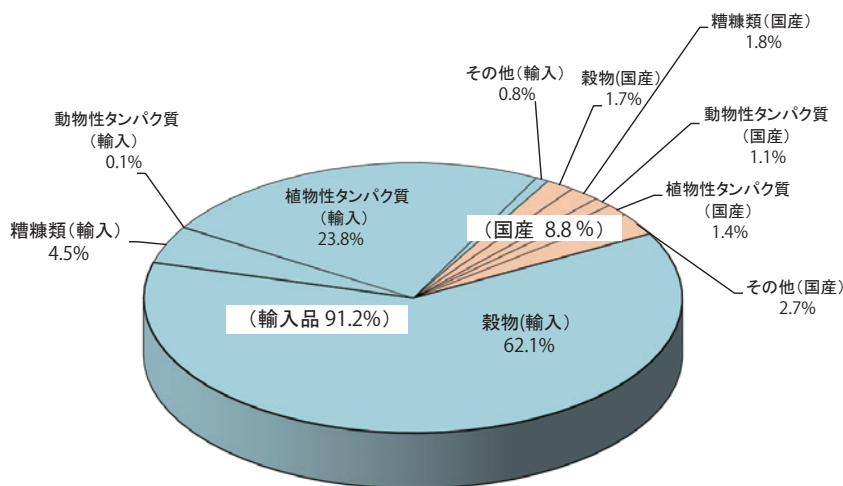
資料：韓国飼料協会の資料および公益社団法人配合飼料供給安定機構「飼料月報」を基にalic作成
注：日本のでん粉かす、パーム油かすは、その他に含まれるので不明。

(3) 配合飼料の自給率

韓国の配合飼料原料の国産・輸入品の内訳を全畜種合計で見ると、重量ベースの国産原

料の割合は8.8%となっている。日本の配合飼料の国産割合はカロリーベースで14%となっており、直接の比較は困難だが、概ね日本と同様の自給率と推計される。(図14)。

図14 配合飼料原料の国産・輸入別品目別の内訳（2014年）



資料：韓国飼料協会の資料を基にalic作成

注1：全ての畜種用の配合飼料原料の使用量の合計を重量ベースで算出。

注2：糟糠類、植物性タンパク質およびその他については、日本の算出方法に準じ、韓国国内で生産されたものであっても輸入原料由来と考えられる部分については、輸入としてalicで試算。

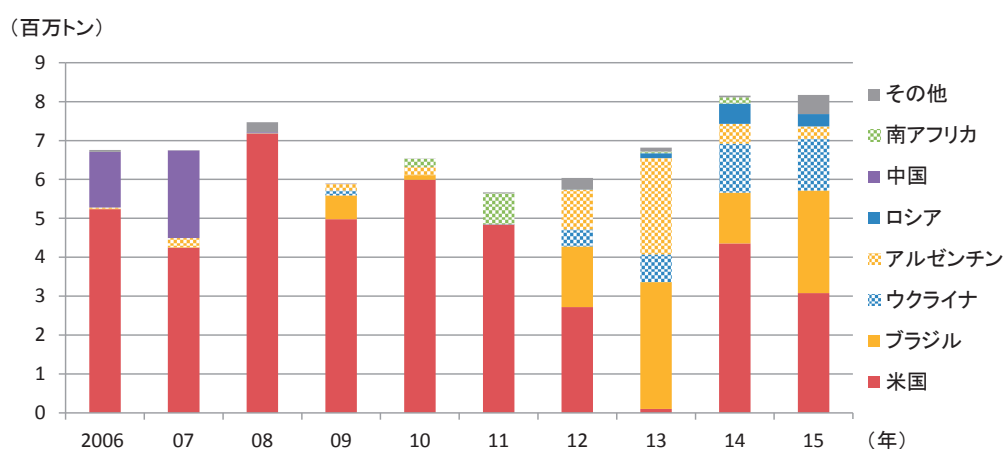
4 配合飼料原料の輸入動向

前述の通り、韓国は配合飼料原料の多くを輸入に依存しているが、原料価格の状況に応じて、輸入先国や原料を柔軟に変更している。主な飼料原料の輸入価格と輸入先国の近年の動向は、以下の通りである。

(1) 飼料用トウモロコシの輸入動向

2015年の飼料用トウモロコシの輸入量は817万トンで、うち米国産が308万トン、ブラジル産が264万トン、ウクライナ産133万トンなどとなっている（図15）。

図15 飼料用トウモロコシの国別輸入量の推移



資料：「Global Trade Atlas」

注：HSコード1005.90.1000（飼料用トウモロコシ）。

2006年以降の飼料用トウモロコシの輸入動向を見ると、2006年から2008年まで増加傾向で推移し、輸入先の大半を米国と中国が占めていたが、2008年にトウモロコシ価格が高騰したことで、2009年以降の輸入量は減少傾向となり、輸入先についても、米国からの輸入量を減少させ、価格の安いブラジルおよびアルゼンチンの南米諸国やウクライナに切り替えている。

その後、2012年以降の輸入量は増加傾向で推移してきたが、2012年6月末の米国の干ばつによるシカゴ相場の高騰を受け、調達先を南米諸国およびウクライナに大きく切り

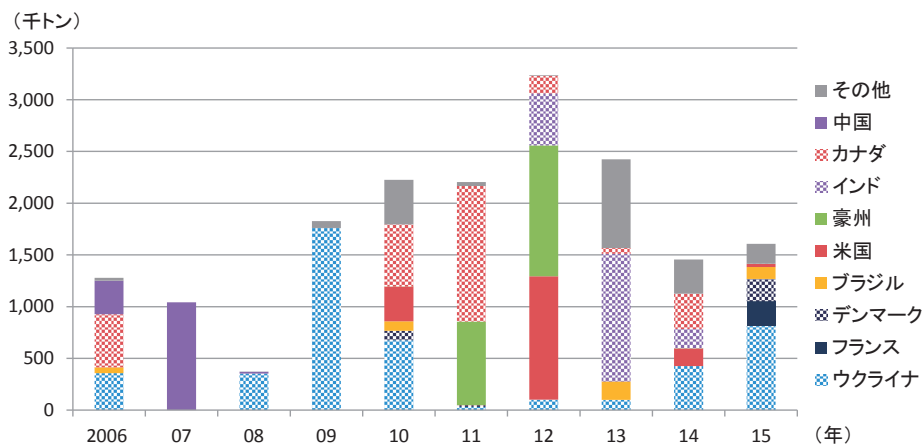
替えた結果、2013年の米国からの輸入量は、わずか10万トンにまで減少した。

2014年は、トウモロコシの価格が下落してきたことから、米国からの輸入量は436万トンと前年の40倍以上に回復している。

(2) 飼料用小麦の輸入動向

2015年の飼料用小麦の輸入量は161万トンで、うちウクライナが81万トン、フランスが24万トン、デンマークが21万トンなどとなっている（図16）。

図16 飼料用小麦の国別輸入量の推移



資料：「Global Trade Atlas」

注：HSコードは2011年までは1001.90.9020、12年以降は1001.99.1090（飼料用小麦）。

2006年以降の飼料用小麦の輸入動向を見ると、まず、2006年の主な輸入先はカナダ、ウクライナおよび中国であった。輸入量は2006年の128万トンから2008年には原油価格の高騰による穀物価格の上昇を受け、37万トンまで大きく減少している。

2009年は、ウクライナからの輸入が急増し、176万トンと前年の5倍程度に達したが、ウクライナが、2010年10月から自国の不作を理由に輸出を1年間制限したため、2010年以降の同国からの輸入が急減した。このため、同年以降、カナダ、米国および豪州からの輸入量が増加した。

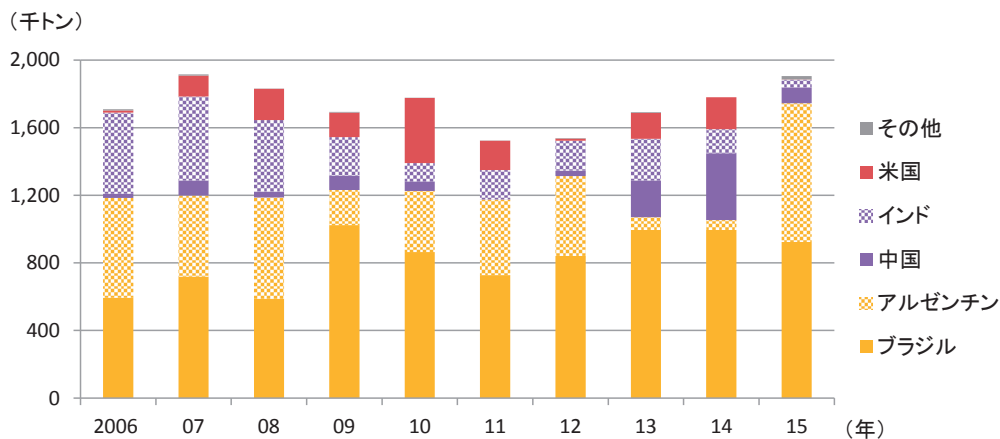
また、2012年には、トウモロコシの取引価格が高騰したことから、比較的安価であつ

た小麦の輸入量は前年比47%増の324万トンと大幅な増加となった。翌2013年も2011年よりも約10%多い水準の輸入量があったが、2014年以降は、トウモロコシの価格が下落してきたことから、2014年の小麦の輸入量は145万トンまで減少したが、ウクライナ産の輸入量は42万トンと再び増加に転じた。

(3) 大豆かすの輸入動向

2015年の大豆かすの輸入量は190万トンであり、主な輸入先は、ブラジルが92万トン、アルゼンチンが82万トンなどとなっている(図17)。

図17 大豆かすの国別輸入量の推移



資料：「Global Trade Atlas」
注：HSコード2304.00.0000（大豆かす）。

2006年以降の大豆かすの輸入量の動向を見ると、ブラジル産は、毎年一定の輸入実績があるものの、米国産の輸入量は輸入価格が下がった2010年などは増加したが、輸入価格が上昇すると減少するといった傾向が見られる。アルゼンチンからは比較的安定した輸入があったが、2013年、2014年は同国による輸出税の影響により激減した。

(4) 飼料原料の調達方法

このように、韓国では飼料原料となる穀物の種類や輸入先を価格に応じて柔軟に変更していることから、これにより配合飼料価格を

抑えていることが分かる。

この背景として、韓国は、先物市場におけるリスクヘッジを狙った長期契約型の取引ではなく、スポット的な現物取引を中心としていることが挙げられる。また、韓国飼料協会によると、その調達方法に国際入札方式を採用しており、飼料メーカー自らが、海外の大手穀物メジャーの韓国内の代理店に入札参加を募り、入札を行って契約するといった方式が中心となっている。

韓国では、飼料会社と穀物メジャーとの間を取り持つ商社が存在しないため、飼料メーカー自らが、海外の大手穀物メジャーと取引を行うようになっている。

5 おわりに

韓国では、食肉の需要が横ばいから微増傾向で推移していることから、このパイを国産品が占めるのか、輸入品が占めるのかの競争になっている。このため、生産者は規模拡大によるコスト削減や生産資材費の削減に努めると共に、ブランド化・高付加価値化による

価格維持、国産食品の認知度向上のためのPRなどに努めているところである。

我が国にとっても、貿易自由化の進む中で国産食肉の需要維持、消費拡大に向けて、取り組む韓国から学ぶべきところは多い。